

❖一高と工業、三保から折戸へ❖

1951年4月、静岡県の柚木と駒越の2カ所に分かれて開校した東海大学高等学校は、1953年に静岡県清水市三保（現静岡市清水区三保）に移転、1959年に東海大学第一高等学校と校名を変更した。時計塔のついた本館校舎は1956年竣工（後に時計の部分に校章がつけられた）、フェニックスの木とともに同校のシンボルであった（写真❶）。「一高」の呼び名で親しまれた同校は、サッカーや吹奏楽の強豪校として全国に名を馳せた。

東海大学工業高等学校は1959年4月、三保の一高の敷地内に開校。しばらく木造の仮校舎で教育活動を展開していたが、1962年度の途中に清水市折戸（現静岡市清水区折戸）にY字型の校舎（写真❷）が竣工し、移転した。部活動ではラグビー、自転車、ヨットなどが全国大会で活躍。長く男子校だったが、1992年度から共学となった。

下の2枚の航空写真は、折戸の本学清水校舎（現静岡キャンパス）をとらえたもの。1990年ごろ撮影の写真❸では、工業高校のY字型校舎が確認できる。Y字型校舎の上、野球場があった場所に1998年11月、新校舎が竣工。1999年4月に今度は一高が折戸に移る形で工業高校と統合、東海大学付属翔洋高等学校として新たな一歩を踏み出した。

2003年には東海大学第一中学校が東海大学付属翔洋中学校と改称し、柚木から折戸の翔洋高校の校舎内に移転。2012年4月には三保にあった付属小学校・幼稚園も折戸に移転した。同年撮影の航空写真❹では、旧工業高校Y字型校舎の跡地に付属小学校・幼稚園の新校舎・園舎が建てられたことが分かる。



❶



❷



❸



❹

CONTENTS

❷ In 1933—1934, Europe 松前重義 欧州留学の軌跡

❶ Tokai Fashion Club 14th meeting 付属静岡翔洋高等学校・中部部

In 1933-1934, Europe

松前重義 欧州留学の軌跡

学園建学の9年前にあたる1933年、逓信省工務局の技師だった松前重義は、無装荷ケーブル通信方式の実用化に向け、日夜実験に取り組んでいた。その最中に、電話事業の研究を主目的とした1年間のドイツ（欧州）留学を命じられる。ベルリンを拠点とした公務を済ませた松前は、特別に許可を得て、およそ1カ月にわたってデンマークの教育機関・国民高等学校などを視察。「私にとってかつてこれほど、心に充足感を覚えた旅はなかった」（『わが昭和史』）と振り返るこの体験が、学校法人東海大学の建学にどのようにつながっているのか。松前の留学における足取りを追うことで、改めて探る。



欧州留学中の松前重義



ドイツ留学の打診 葛藤の末に応諾

松前重義が逓信省から「電話事業研究の為満一カ年独逸国への在留」を命じられたのは、1933年3月9日のことだった。当時31歳、入省から間もなく丸8年が経とうというところである。

官費による留学は、エリートとして将来を約束され、出世コースを歩むことを意味していた。

「私ももちろんいちおうは嬉しかった」だが、「『こいつは困ったな』というためらいの気持がつよく沸き上がった。」（『わが人生』）

このころ松前は、無装荷ケーブル通信方式の実用化に向けた研究に取り組んでおり、そのめどが付き次第、教育事業へ転身しようと考えていたのである。官吏の留学出張規約には、留学後の2年間は所属官庁に残る義務があった。「人生わずか五十

年”は実感である。教育事業の成就にせめて二十年はほしい。とす

れば遅くとも三十一、二歳で役人勤めを辞めなければならない。ドイツに留学するのは結構だが、そのために自分の人生設計の予定が狂わされるのは困る」（前掲書）と考え、葛藤の末に上司、逓信省工務局電話課の課長・梶井剛に留学の辞退を申し入れた。

しかし、梶井の対応は実に寛容だった。「帰ったらすぐ辞めてしまえばいい」「いざとなれば私のほうで何とか便宜的処置も取ってあげれると思う」「デンマークに関心があるとか。いい機会だから、留学のついでにデンマークにまわってきたら」「一日じゅう公務に拘束される義務はない（中略）大いに見聞を広めることもまた留学のひとつの目的（中略）万事“松前流”で結構だから、ご苦労だけど、ひとつドイツに行ってもらいたいと思うんだがね」（前掲書）

梶井の寛大な説得に折れた松前は辞意を撤回、留学を受け入れる。

1933年当時、ドイツでは1月に



梶井剛

—留学に至るまで—

1901年に熊本に生まれた松前重義は、東北帝国大学に進学。工学部電気工学科で学び得た、知識と技術を生かせる場所を求め、1925年逓信省に入った。大学の研究室に残る、あるいは民間企業に就職する道もあったが、松前は「公共事業での開発推進は、その利益が直接的に国民のものとなる。一部の手柄や利益のために奉仕するよりも、国家や国民の利益のために献身したい、というのが当時の若い私の使命感であったのだ」（『わが人生』）と、その選択の理由を述べている。

しかし、実社会に出た松前は、理想と現実との差に戸惑い、思い悩むことになる。そんな日々を救ってくれたのは、下宿の隣人であり、彼に誘われて通うこととなった内村鑑三主宰の聖書研究会であった。

やがて松前は、聖書研究会で紹介されたデンマーク復興の歴史に感銘を受ける。北欧の小国が、戦争の荒廃から立ち直っていく姿、とりわけ教育の力に強く惹かれ、「聖書の歴史観と人生観、世界観とを教える青年教育によって、今日の豊かなデンマークが生れた事実は私を動かした。『私もまた教育によって愛する祖国、平和日本を興そう』これが私の人生の理想となりました。」（『回顧と前進—東海大学建学の記』）と決意するに至る。

1926年に結婚し、翌年に長男、1931年に次男を授かった松前は、1930年ごろから無装荷ケーブル通信方式の開発に注力し始める。留学の打診は、公私にわたって多忙な日々の中で、もたらされた。



松前が入省したころの逓信省庁舎外観

ヒトラーがナチス政権を樹立し、ファシズム国家イタリアのムッソリーニと提携を強化、米英仏との対立を尖鋭化させていた。一方で日本は中国大陸への侵攻が国際世論の批判を

浴びて国際連盟から脱退、日独伊の三国同盟に突き進もうとしていた。そうした激動の時代、同年4月1日に松前は、横浜港から欧州に向け旅立ったのである。

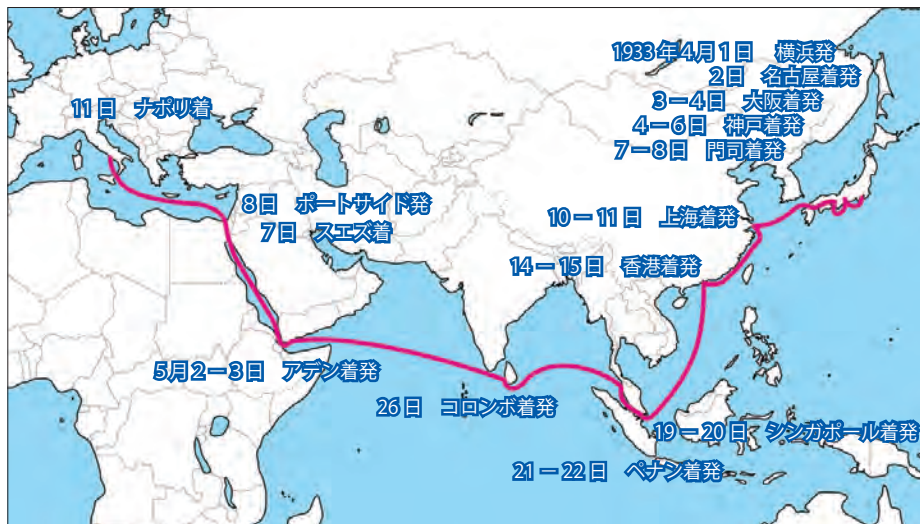
1933年
4月
1日

横浜を出港、白山丸で 海路ヨーロッパへ

1933年4月1日、松前を乗せた客船・白山丸は横浜を出港、一路ヨーロッパへと向かった。スエズ運河を越え、5月11日ごろイタリア・ナポリに到着したと伝わっている（日本郵船歴史博物館提供「白山丸

運行スケジュール」より。実際の日付とは異なった可能性がある）。

ナポリで下船後、ポンペイの遺跡を訪ねた松前は、ローマを通過し、ピサの斜塔を右に眺めながらジェノバを抜け、スイスへと向かった。



白山丸の航路図。出入港日は事前に予定されたスケジュールであり、実際の日付とは異なった可能性もある

1933年
5月
～6月

スイス・ルツェルンで 無線の国際会議に出席

松前は国際無線諮問委員会の会議に出席するため、会場であるスイス・ルツェルンに向かった。この地には約1カ月滞在している。

会議は主にフランス語で進行され、「英語とドイツ語しかわからない私は、正直のところ心身ともにくたくたに疲れてしまった」（『わが人生』）という。

それでも松前は精力的に、会議の合間を縫って各国の学者や技術者たちと接触、議論を戦わせた。

無装荷ケーブル通信方式に関する

諸論文はこのころ既に英訳され、各国の主たる学会に送付されていたが、目を通していた者は極めて稀だった。

松前はその悔しさから、帰国後は一刻も早く無装荷ケーブル通信方式を実用化させ、見返してやろうと心に誓った。それと共に、教育事業に着手した暁には、科学教育の振興に力を尽くそうと決意した。

スイスを後にした松前は、いよいよこの留学の主たる目的地であるドイツへと向かう。



松前が渡欧の際に乗船した日本郵船所有の客船「白山丸」（写真提供：日本郵船歴史博物館）



欧州航路の途上にあった白山丸の船内で撮影された1枚。右に立つ柔道着姿が松前重義（1933年4月ごろ）



スイス・ルツェルンにあるベスタロッツ・レストランの前で。拠点をドイツ・ベルリンに移した後、同地を再訪した1933年6月13日の撮影と記されている

1933年
6月～1934年
1月

ドイツ・ベルリン拠点に 同国の通信事情を探る

松前重義は先述の通り「^{ドイツ}独逸国への在留」を命じられて渡欧しており、その大部分をドイツで過ごした。官庁や通信施設、研究所、工場などを視察したほか、無装荷ケーブルについて電気通信関係者と議論を行うなどしている。

当初はベルリン市南西部の住宅街、ウィルメルスドルフ区ナッサウッセ街53番地のフラウ・テージング家に寄宿した。まず、ライヒスポスト（日本の通信省に相当する、ドイツで電信電話や郵便事業を管轄する行政機関）を視察。その後、当時



ドイツ国内で乗合自動車を利用、車内の左から4人目が松前重義（ハンプルクか）

▶ベルリン市街の名所を訪ねる松前重義



世界の電気通信技術をリードしていたジーメンス・ウント・ハルスケ社を訪問した。同社の中央研究所主任技師で長距離電気通信技術の世界的権威として知られていたH・F・マイヤー博士と無装荷ケーブルの是非について意見を交わしたが、博士は無装荷ケーブルを通信網に採用することに否定的で、両者の一週間に及ぶ激論は物別れに終わった。松前は「このときほど、言葉の壁が相互理解をいかに妨げるか、痛感したことはなかった」（『わが昭和史』）と語っており、これが後に東海大学が語学教育に力を入れる原点となった。

★ ★ ★

3カ月ほどして下宿をシュパンダウ区ジーメンス街イレーネ夫人宅に

移した松前は、引き続き電信電話関係の主要機械工場の視察や学者・技術者などを訪問して、無装荷ケーブルについて意見を交換した。

寄宿先のイレーネ夫人は松前に「^{ヴルカーニツェル・ヤバーナー}爆発的日本人」とあだ名をつけた。「ひっそりと勉強しているかと思うと、突然爆発するような号令をかけて、デンマーク式の体操みたいな真似をするし、突拍子もない時に不意に旅行を思い立って、四、五日も家をあけてしまう。しかも行き先が普通の観光客の見に行きそうなところではまるでない。」というのが、その理由である（渡邊啓助「無装荷松前」『新青年』1942年2月号。原文の旧仮名遣いの表記は現代仮名遣いに改め、適宜読点を補った）。

柔道に救われた ドイツでの日々

松前重義は中学生のころから柔道に打ち込み、留学当時は有段者となっていた。その柔道が、松前のドイツでの日々を救い、彩ってくれた。

松前はドイツ・ベルリンに到着してすぐ、ライヒスポストに視察を申し入れるが、実は一度、先方に拒絶されている。その理由について松前は、ヒトラーによるナチス政権の基礎が固まったばかりで、政治機構を再組織する途上だったからではないかと推測している。

ライヒスポストの素っ気ない対応に憤慨していた松前の元に、日本で

の松前の柔道歴を知る北畠教真氏が訪ねてきた。北畠氏は仏教大学を出た後ドイツで哲学を学びながら柔道の指導をしており、松前を柔道場に案内するとともに、ベルリン^{ユーユック}柔術倶楽部の理事長であるグラゼナップ氏を紹介してくれた。同氏はヒトラーが旗揚げした際の同志でもあった。

柔道で汗を流した後、松前らはビールで喉をうるおしながら、ドイツ柔道のあり方などに花を咲かせる。その席で松前が、先日ライヒスポストに施設の視察を断られたと語ると、クラゼナップ氏は大いに驚き、ヒトラーに直接電話を入れた。

翌朝にはライヒスポストは大騒ぎとなり、松前に視察をしてほしいと

依頼してきた。担当者に「視察していただかないと私の首が飛ぶ」と懇願された松前は、視察することを受け入れるとともに、以後日本からドイツに留学する者が円満に視察を許されるよう確約を取った。

松前は「この時はじめて、柔道というものが人間同士にあたたかい友情と信頼とをもたらし、立場や国境を超えてまで人間同士を深く結縁せしめる役割をも果たすことに気づかされた」（『わが人生』）と語っている。

★ ★ ★

その後、ジーメンス・ウント・ハルスケ社に出入りするようになった松前は、社内に組織されていた「ユーユッククラブ」に持参した柔道着を

ドイツ国内外の 各地へ足を伸ばす

松前は公務の合間を縫って、ドイツ国内のほか、ヨーロッパの各地へと足を伸ばしている（下表参照）。

1933年の8月の半ばには北欧のスウェーデン、ノルウェー、デンマーク3カ国に、あわせて3週間ほど滞在した。翌1934年の冬季にデンマークを訪れたことについて「私は北欧の文化を探るに最も良い時季を考へた。而して冬季が其の目的を達



ドイツ・チューリンゲンの森の中で

するに最良の時季であると言ふ結論を得た」（『デンマークの文化を探る』）と述べている。この結論を得るためには、まず夏季の北欧、特に酪農が盛んなデンマークの農村を経験し、冬季の農村と比較する必要があると思われる。

1933年の秋の半ばに訪れたドイツ中部のチューリンゲンでは、マルティン・ルターが滞在したヴァルトブルク城で、宗教改革の口火を切ったルターの偉業を偲んだ。また、教育者ヘルマン・リーツが創設した田園教育塾（田園教育舎）を訪問。校長から日本人が来たのは初めてだと言われ、大いに歓迎を受けたという。

11月半ばに訪れたドイツのハイデルベルクではカントやヘーゲルら哲学者を偲んで3日間散策。国会選挙の時期と重なり、町のそこかしこにナチスの旗が掲げられていた。



イタリア・ローマ近郊の遺跡を見学

1933年暮れにはイタリア政府の招待で、ローマにおける東洋人学生大会に出席。1週間滞在し、バチカンなどを訪れているほか、当時首相だったムッソリーニの演説を聴くなど貴重な体験も。その後、フィレンツェ、ベネチアも訪問している。

時期	1933年、松前重義がドイツ・ベルリンを拠点に足を伸ばした訪問先
6月上旬	ドイツ国内・ポツダム
6月13日～23日	スイス・ルツェルン～イタリア・ミラノ～オーストリア・インスブルック
8月半ば	スウェーデン、ノルウェー、デンマーク（あわせて3週間ほど）
10月1日	ドイツ国内・バイエルン
秋半ば	ドイツ国内・ヴィッテンベルク、ヴァイマル、チューリンゲン、ヴァルトブルク
11月半ば	ドイツ・ヴォルムス、ハイデルベルク～フランス・ストラズブル～スイス・チューリッヒ
12月下旬	イタリア・ローマ、フィレンツェ、ベネチア

寄贈。時間の許す限り道場に顔を出して稽古に取り組んだ。それまで名前通りの「柔術」然としていた内容に対して、日本式の講道館柔道を指導するうち、社内で柔道の「グロス・マイスター（大先生）」と呼ばれるようになり、誰彼となく挨拶をしてくれるようになった。本業である視察にも大いに役立ったという。

★ ★ ★

松前のドイツ・ベルリン滞在中、講道館柔道の創始者・嘉納治五郎も当地を訪れている。嘉納は1933年当時、国際オリンピック委員会の委員として、6月にオーストリア・ウィーンで開かれた同委員会に出席。1940年に東京にオリンピックを招

致するため、また将来、国際柔道連盟を創設する足掛かりを築くため、欧州各国を訪問していた。

嘉納は6月3日にウィーンに到着。6月中頃にドイツに移り、ベルリンを中心に7月末日までドイツに滞在した。ベルリン大学をはじめとする各地の学校や警察、工場、町道場などを見学し、柔道の指導や講演を行った（小谷澄之『柔道一路 海外普及につくした五十年』1984年、ベースボールマガジン社）。

ベルリンの地で松前は、嘉納と初めて面会。嘉納に随行していた鷹崎正見氏と松前が旧知の仲だったこともあり、松前が嘉納の講演や指導の手伝いをすることもあった。

松前は嘉納の印象として「先生は小柄なかたであったが、羽織袴姿で歩かれると不思議に大きく見える器量の持主であった。先生は語学にお強く、ドイツ語もなかなか達者で、講演や指導解説はほとんど通訳ぬきであった。しかも話の内容は哲学的であり、かつ科学的である。（中略）嘉納先生の講演や指導解説がドイツ柔道界の発展や普及に裨益したところのものは、まことに大であった。やはり先生は一流の国際人であった。ドイツ人柔道家たちが小柄な先生を仰ぐこと神に対するがごときであった情景が、今でもまぶたに浮かぶほどである。」（『わが人生』）と振り返っている。

1934年
1月
～2月

念願のデンマーク視察 同国の教育を実体験

ドイツでの公務を終えた松前重義は、1934年1月半ばから2月半ばにかけて、およそ1カ月の間デンマークを回り、同国の教育機関であるフォルケホイスコーレ（国民高等学校）などを視察した。その詳細は著書『デンマークの文化を探る』に記されている。

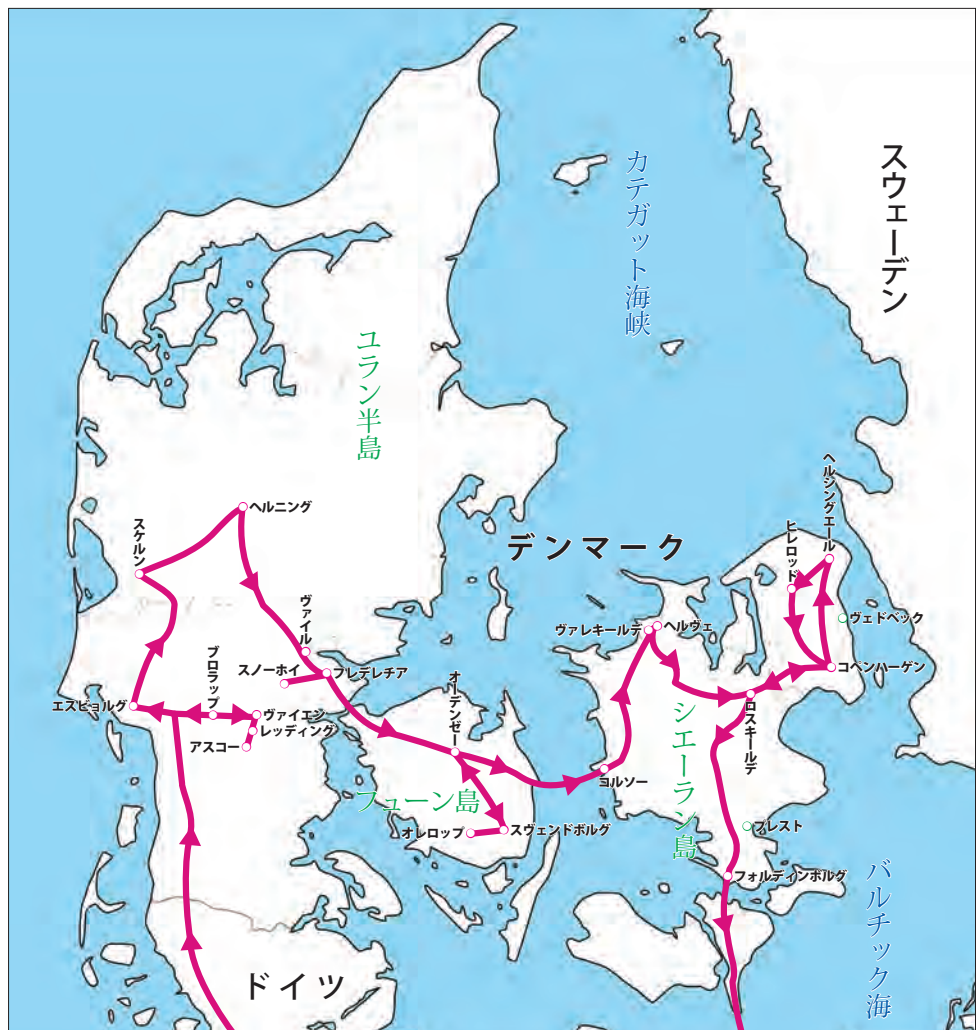
汽車や乗合自動車、連絡船、そして徒歩といった手段を用いて、デンマークを構成するユラン半島、フューン島、シエーラン島の各地——都市から田舎町、酪農の町や港町など、実にさまざまな場所——を精力的に駆け巡り、あわせて10もの教育機関（国民高等学校のほか農酪学校、家政塾を含む）を訪問した。

松前は、各校で実際にさまざまな講義に参加しながら、教職員に教育方針や制度、教授方法などを詳しく尋ね、施設や設備をその目でつぶさに確かめ、学生らに学ぶ意義や意識などを問い掛けた。

松前は、内村鑑三の著書や聖書研究会での講話書などを通じて、国民高等学校の創始者であるニコライ・グルントヴィの教育理念が、デン

▶アスコー国民高等学校では泊まり込みで講義を体験した。1934年1月25～27日

▼松前のデンマーク視察ルート



マークという国家の形成に深く関わっていることを理解していた。しかし、現地を視察し、その実情に肌で触れることで、想像していた以上に、デンマークにおける国民教育や農業振興の実践面でグルントヴィの精神が生かされていることを実感した。

グルントヴィの母校・コペンハーゲン大学を訪れた松前は、グルントヴィの銅像に「私もいつの日か、祖国の将来のため、人間教育に邁進したい」（『わが昭和史』）と心に誓った。

★ ★ ★

デンマークの教育を範として、松前は1936年1月に私塾・望星学塾を東京に開設。同塾を母胎に1942年、後の学校法人東海大学が創設された。1943年には東海大学の前身である航空科学専門学校が静岡・清水に開校。戦中・戦後の苦難を乗り越え、学園は1970年、デンマーク・コペンハーゲン郊外のヴェドベックに初の海外拠点となる「東海大学ヨーロッパ学術センター」を開設。1988年4月には同じくコペンハーゲン郊外のプレストに初の海外教育



レッディング国民高等学校で記念撮影。
1934年1月29日

日付	1934年のデンマーク視察における松前の主な足取りと行動
1月19日	朝、ドイツ・キール着。電気通信の工場を見学。正午、汽車でキール発。夜、デンマーク・エスビョルグ着、同地泊
1月20日	エスビョルグのホイスコール・ハイム（国民高等学校卒業生を対象とした宿）で夕食
1月22日	エスビョルグ郊外の労働国民高等学校を訪問、視察。町の図書館を見学。夜、体操団の活動を見学
1月23日	正午、汽車でエスビョルグ発、午後農民町プロラップ着。農場、植林の様子を見学。同地泊
1月24日	ラーデルン農協学校を訪問。汽車でプロラップ発、ヴァイエン着、同地泊
1月25日	アスコー国民高等学校訪問。夜、体操団の活動を見学
1月26日	アスコー国民高等学校にて終日、学生生活を体験。美術史や体操、政治経済、法律などの講義を受講。同校泊
1月27日	アスコー国民高等学校で朝食、朝の礼拝、美術史の授業に参加。車でヴァイエンに戻り、同地泊
1月28日	乗合自動車でレッディングへ移動。現地の子どもたちにサインを求められ応じる。同地泊
1月29日	レッディング国民校等学校訪問。午後、車でヴァイエンへ移動。汽車でエスビョルグ着、同地泊
1月30日	エスビョルグ発、スケルン、ヘルニング、ヴァイルの経由地で植林事業の様子を観察。フレデレチア着、同地泊
1月31日	車でスノーホイ女子体操国民高等学校を訪問。連絡船でフェーン島へ渡り、陸路オーデンゼー着、同地泊
2月1日	オーデンゼーのアンデルセン博物館を見学。車でスヴェンドボルグへ移動、同地泊
2月2日	スヴェンドボルグから乗合自動車で移動、オレロップ体操国民高等学校を訪問。スヴェンドボルグに戻り同地泊
2月3日	雪を突いて散歩に出掛ける。ホテルで書き物と手紙の静かな一日を送る
2月4日	スヴェンドボルグから汽車と連絡船でヘルヴェへ移動、同地泊。日曜の晩の集会とフォーク・ダンスを見学
2月5日	ヘルヴェの西方、ヴァレキールデ国民高等学校を訪問。コペンハーゲンへ移動し同地泊
2月6日	午後ヘルシングエールへ移動、同地泊
2月7日	ヘルシングエールの国際国民高等学校を訪問。汽車でヒレロッド着、同地泊
2月8日	ヒレロッドのフレデリックスボルグ国民高等学校を訪問。コペンハーゲンへ移動、同地泊
2月10日	コペンハーゲン大学、国立図書館、グルントヴィ教会などを見学。ロスキールデへ移動、同地泊
2月12日	ロスキールデ郊外のハラルドスボルグ家政塾を訪問。ベーコン製造場を見学、フォルディンボルグ泊
2月13日	連絡船でバルチック海を渡り、汽車でドイツ・ベルリン着

機関「東海大学付属デンマーク校」を開校した。同校は2008年3月に閉校となったが、2009年からはデ

ンマークの教育機関として、「望星国民高等学校」の名で活動を継承している。

左ページの地図と上の表は松前の著書『デンマークの文化を探る』を基に作成。地名や校名などの表記は同書に倣った。1936年・向山堂書房刊の同書は、2002年・本学園刊『定本 松前重義全集 著作篇第一巻』に収録。本学図書館のWEBサイト【<https://library.time.u-tokai.ac.jp>】の「リポジトリ検索」から書名を入力して検索、PDF版のダウンロードが可能

1934年2月～3月 フランスで運命的な出会い 文理融合を支えた足利と邂逅

2月下旬（家族に宛てた手紙には「二十五日頃」と記述）、松前はドイツ・ベルリンの下宿を引き払い、フランス・パリに向かった。約1カ月滞在したパリで、後の東海大学にとって運命的な出会いがあった。
あしかがあつじ
 足利悋氏（当時、京都帝国大学講師）との邂逅である。

1年以上前からサンスクリット語や古代ペルシア語研究のためフランスに留学していた足利は、宿舎（パリ国際大学都市日本館、通称・薩摩開館）のロビーで卓球をしている松前と最初に言葉を交わしたと述懐している。二人は1901年生まれのもい年。互いの生い立ちや将来の夢などを語り合ううちに、電気通信工学とインド・イラン学という、専門が

全く異なる者同士が理解を深め、唯一無二の友情を育んでいった。

足利は、松前のパリ無線電信局訪問時に通訳を務めたほか、フランス革命の遺跡見学などにも同行した。松前からデンマークの歴史や国民高等学校の話聞き、「非常に大きな印象を与えずには置かなかった」（1975年『松前文庫』第1号）と振り返っている。実際にフランス留学期間を終えた足利はその後、ドイツ滞在中にデンマークに足をのばし、コペンハーゲン大学のほか2、3の国民高等学校を訪問した。

1946年の東海大学（旧制）開学にあたって松前は、足利に文科系の教員の人選や、認可に必要な図書の収集などを依頼した。デンマークの教



パリ無線電信局を視察。右端が足利悋氏

育思想を松前と共有していた足利の存在を抜きにして、今日の東海大学の“文理融合”という教育理念は成り立たず、総合大学としての東海大学の存在もまた、なかったことだろう。

1965年、京都大学を定年退官した足利は、東海大学の文学部長・教授に就任。1967年から1975年には学長も務めた。足利は松前との関係性を「パリ時代に始まる両人の不断の友情、仏教的表現を借れば『一大因縁』とも言うべきものであろう」（前掲書）と表現している。

1934年
4月
～5月

イギリスの文化・歴史に触れ アメリカで高い生産性を知る

松前重義は1934年4月ごろにフランスからイギリスに渡った。イギリスにも約1カ月滞在し、各地を訪問・視察。インターナショナル・スタンダード・エレクトリック社では、同社の首脳陣と無装荷ケーブルについて議論を交わしている。

プライベートではロンドンの詩人ジョージ・ゴードン・バイロンの家や、内村鑑三が尊敬の意を表していた歴史家トーマス・カーライルの銅像などを見学した。

★ ★ ★

1934年4月末から5月初旬ごろ、松前はイギリスから蒸気船「第三オイロッパ号」でアメリカ東海岸のニューヨークに渡り、1カ月強アメリカ各地を回った。アメリカでも、ベル電話研究所や

AT&T社を訪問して、技術者たちと積極的に面会し、無装荷ケーブルについて質問を受けたり、議論を交わすなど、同国の電気通信技術の情勢を探っている。

プライベートではマサチューセッツ州に足をのばし、内村鑑三が学んだアマースト大学を訪問。校庭で撮影した写真の説明として、「芝生に横はつて天を仰ぎ^{なが}ら恩師内村先生は此の校庭に教育せられた。本校校庭と日本の将来との間に大なる関係があると思つて感



アメリカではグランドキャニオンにも訪れた

慨無量であつた」（『デンマークの文化を探る』）と記している。

その他、ミシガン州デトロイトにある自動車製造大手、フォード社の工場を見学した松前は、組み立てラインの流れ作業に驚嘆。また、油田を訪問・視察した写真も残っている。アメリカの高い生産性を目の当たりにしていた松前



英国ロンドンの詩人ジョージ・ゴードン・バイロン宅前で

は、後に日本とアメリカの戦端が開かれると、「これはいかん。早く終戦に持っていけないと、とんでもないことになるぞ」（『わが昭和史』）と思い、日本の生産力を詳細に調査して米国との隔たりを報告し、終戦に向けて東條英機内閣の倒閣運動を展開した。それが、1944年7月に二等兵として南方戦線に送られる懲罰召集につながったと言われている。

カリフォルニア州ロサンゼルスでは、ウィルソン山天文台やロングビーチを訪れた。バスの座席やプールの利用における差別的な扱いを目にして不快に感じたことを、後に著書『東海大学建学の精神』などで触れている。



アメリカで内村鑑三の母校アマースト大学を訪問

1934年
6月
21日

帰国、その足で会議に参加し 無装荷ケーブルの有用性訴える

松前は6月上旬、貨客船「浅間丸」に乗船し帰国の途に就いた。アメリカ西海岸のロサンゼルスから6月4日、あるいはサンフランシスコから同6日に乗船・出港とされている（前者の可能性が高い）。同11日にハワイ・ホノルルを経由、21日に横浜港に到着した（『就航90周年記念 客船浅間

丸～サンフランシスコ航路をゆく～』2019年、日本郵船歴史博物館）。

その足で逋信省に向かった松前は、ちょうど開催されていた会議に飛び入り参加して欧米の電気通信事情を報告し、無装荷ケーブルの有用性を訴えた。これによって日本と大陸を結ぶ通信網に無装荷ケーブルを採用する方針が固ま



松前が帰国時に乗船した「浅間丸」（写真は1929年10月4日、大阪港を發つ浅間丸と見送る人々。提供：日本郵船歴史博物館）

り、実用化が図られていくこととなる。



学園史資料センター Information

創立者・松前重義の欧州留学の軌跡は「デジタル展示室」でも公開しています

学校法人東海大学学園史資料センターがインターネット上に開設している「学園史デジタル展示室」では2024年11月1日から、「東海大学、教育の原点——松前重義 欧州留学の軌跡」と題した企画展を公開しています。松前の同留学からの帰国90周年を記念したものです。

本誌2～8ページにわたって紹介してきた松前の欧州における足跡に加え、デジタル展示ならではのコンテンツとして、松前自身が現地で撮影してきた映像（動画）をご覧ください。

今から90年前の欧米の風物をとらえた映像の数々



デジタル展示室「松前重義 欧州留学の軌跡」トップページ

は、学園関係者に限らず、一般の方々にとっても貴重な資料と言えるでしょう。

パソコンやスマートフォンなどからアクセスし、松前の留学の足取りを追ってください。

◎学園史デジタル展示室 URL

(QRコードはこちら→)



<https://www.tokai-archives.com/exhibition/>

学園史資料センター日録 (抄録)

2023年4月～2024年3月

【2023年4月】

27日 全国大学史資料協議会（大学史協）東日本部会第212回幹事会出席（オンライン）

【5月】

11日 公益財団法人松前国際友好財団にて資料調査（於東京都杉並区、以下10月13日、10月16日に作業実施）

17日 「故松前節子お別れの献花」参加（於東京都武蔵野市・望星学塾）

18日 大学史協東日本部会2023年度総会、第213回幹事会出席（於東京都千代田区・明治大学駿河台キャンパス）

19日 学園史資料センター全体顔合わせ会（於神奈川県平塚市・東海大学湘南キャンパス）

【6月】

2日 東海大学海洋学部総合資料センターにて収蔵資料点検作業（～3日、於静岡県静岡市）

5日 学校法人学習院 学習院アーカイブズスタッフによる視察受け入れ

【7月】

14日 東海大学付属静岡翔洋小学校・幼稚園にて資料収集調査作業（於静岡県静岡市）

20日 大学史協東日本部会第214回幹事会参加（オンライン）

21日 東海大学海洋学部総合資料センター

にて収蔵資料点検作業（～22日）

31日 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会2023年度総会参加（オンライン）

【9月】

1日 東海大学付属静岡翔洋小学校・幼稚園にて資料収集調査作業

21日 大学史協東日本部会第215回幹事会参加（オンライン）

26日 望星学塾主催2023年度第1回「望星研究会」参加（オンライン、10月27日に第2回、11月24日に第3回参加）

29日 望星学塾主催「望星ゼミナール エジプトシリーズ」参加（於望星学塾、10月13日に第2回参加、於湘南キャンパス）

【10月】

4日 大学史協2023年度総会・全国研究会、見学会参加（～6日、於京都府京都市・立命館大学衣笠キャンパス、京都大学吉田キャンパス）

31日 デジタル展示室にて企画展「みらいへ、つむぐ キャンパスの記憶」公開開始

【11月】

1日 学校法人東海大学第81回建学記念式典参加（於東海大学湘南キャンパス）

3日 東海大学同窓会ホームカミングデー展示支援

14日 津田塾大学および同大学津田梅子資

料室主催「津田梅子の小袖修復プロジェクト」総合報告展・ギャラリートーク参加（於東京都小平市・同大学小平キャンパス）

16日 望星学塾主催「望星ゼミナール 歴史上の震災」参加（於望星学塾）

【12月】

15日 『東海大学学園史ニュース』No.18発行

19日 大学史協東日本部会第217回幹事会、第135回研究会参加（於東京都品川区・昭和大学旗の台キャンパス上條記念館）

【2024年1月】

29日 東海大学海洋学部総合資料センターにて収蔵資料点検作業（～30日）

【2月】

28日 東海大学学園史資料センター編『東海大学資料叢書12 創立者寄稿（序文・巻頭言）』発行

28日 東海大学熊本キャンパス資料調査収集整理作業（～3月1日、於熊本県熊本市）

【3月】

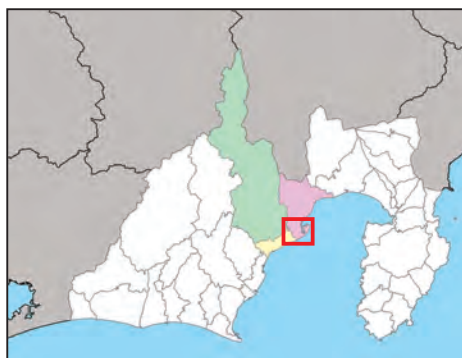
6日 東海大学札幌キャンパス資料調査収集整理作業（～8日、於北海道札幌市）

12日 第62回学校法人東海大学資料編集委員会開催（於渋谷キャンパス）

14日 大学史協東日本部会第219回幹事会、第137回研究会参加（於東京都板橋区・大東文化大学板橋キャンパス）

Tokai Fashion Club

●附属静岡翔洋高等学校・中部部は、学園付属校の中でも屈指の歴史を有しています。そのため、当コーナー開始以来最大のボリュームでそれぞれの制服の変遷をご紹介することになりました。地図で各校の位置関係を簡単におさらいしてから、歴史をひもといていきましょう。



▲静岡県の地図。ピンク色が旧清水市。2003年4月1日付で旧静岡市と合併し、新たな静岡市の一部、清水区となった。緑色が静岡市葵区、黄色が同じく駿河区。赤枠の範囲を拡大したのが左の図

◀東海大学の前身・航空科学専門学校は1943年4月、三保の仮校舎で開校。同年11月に駒越に本校舎を開いた。柚木には1950年代から半世紀以上、第一中学校や短期大学部が置かれた。折戸には1962年から海洋学部と工業高校が置かれ、後に清水校舎、現在は静岡キャンパスと呼称。かつて三保にあった一高と付属小学校・幼稚園、柚木から一中も折戸に移転し、強固な一貫教育体制を築いている

一中・翔洋中

(ページ下段、黄色で表示)

◆1949年「東海大学第一中学校」として駒越に開校。1951年に柚木に移転。

2003年度に「東海大学附属翔洋中学校」に改称し、折戸に移転。2009年度に「東海大学附属翔洋高等学校中部部」に、2015年度に「東海大学附属静岡翔洋高等学校中部部」に校名変更。

1949

東海大学第一中学校開校

●東海大学第一中学校は1949年4月、静岡県清水市駒越（現静岡市清水区駒越）にあった東海大学（旧制）駒越校舎内に併設されました。4月10日に開校式・入学式を開催。当初生徒は男子のみで、制服は詰め襟の学生服でした。学生帽に白線が一本入り、帽章（校章）は富士に波をあしらひ、「東海」と刻まれていました。



●1950年度に2期生約80名が入学、うち6名が初の女子生徒でした。女子の制服は制定されておらず、「清楚なもの」とだけ決められていました。上の写真は1960年の卒業アルバムに収められたもの。

の。女子の服装はまちまちだったことが分かります。ちなみに2期生が卒業記念に寄贈した鐘が、36期生が卒業記念に制作したドームに吊り下げられ、「友情の鐘」として今も構内にあります。

●1951年度に第一中学校は静岡市宮前町（現葵区宮前町）の柚木に移転しました。

移転を記念して襟章を制定。モチーフとなったのは、中学生にふさわしい清らかさと純真さを象徴するタチバナ（橘）の花でした。銀製で、他校の生徒から憧れの眼差しを向けられたそうです。



14th meeting 東海大学附属静岡翔洋高等学校・中部部

学園史編纂員 徳原 彩恵

第一高校 (ページ上段、ピンクで表示)

◆1951年「東海大学高等学校」の名で開校した普通科の男子校。当初は駒越と柚木に分かれ、1953年度から三保に移転した。1959年度に「東海大学第一高等学校」に校名変更。1963年度共学化。

工業高校 (ページ中段、ブルーで表示)

◆1959年「東海大学工業高等学校」が開校。男子校で機械科と電気科を置いた。当初は三保の一高敷地内、木造の仮校舎で学んでいたが、1962年、夏休み明けの新学期から折戸に移転。1986年度に電子情報科を増設。1992年度に共学化。

翔洋高校 (13ページ以降、グリーンで表示)

◆1999年4月、第一高校と工業高校が統合、「東海大学附属翔洋高等学校」として折戸に開校。当初普通科と科学技術科を置いた（2004年度から普通科のみ）。2015年度「東海大学附属静岡翔洋高等学校」に校名変更。

1959

東海大学第一高等学校 に校名変更

●第一高校は1951年4月、静岡県静岡市宮前町（現静岡市葵区宮前町）柚木にあった旧駿河学園高等学校を受け継ぎ、「東海大学高等学校」の名で開校。駿河学園から在籍の2、3年生は東海大学駒越校舎内に併設された建物で、1年生は柚木で学びました。

1952年度から柚木に一本化、1953年度には清水市三保（現静岡市清水区三保）に移転しました。1959年に「東海大学第一高等学校」と校名変更。開校当初から生徒は男子のみで、制服は黒の詰め襟の学生服に制帽。当時の一般的なスタイルです。学生服の襟元には校章と学年色のバッジを着けました。制帽の記章は途中でデザインが変更されました（小判型に波→かもめ）。



●1963年度から男女共学となり、女子の制服が制定されました。紺色のダブルのブレザー、スカートはボックスプリーツです。

▼ブレザーの下には紺色のベストを着ました。幅広のショルダーで、スカートと合わせるとワンピースのように見えます。サイドのファスナーで開閉するタイプと思われます



1963

共学化、女子制服制定

1972 女子制服改定
→次ページへ

1951 東海大学高等学校開校



▲ワイシャツ左胸のポケットには「Tokai」の刺しゅうがある

1959

東海大学工業高等学校 開校

●技術者養成の必要性を強調してきた東海大学が、清水市（当時）の要請に応える形で1959年4月、第一高等学校と同じ静岡県清水市三保（現静岡市清水区三保）に開校しました。1962年に、現在の静岡キャンパスがある清水市折戸（現清水区折戸）へ移転。開校当初から長く男子校でした。

▶1971年ごろの学校案内。全国的に活躍していたヨット部が表紙に。校内で生徒たちは、制服よりも作業服を着用していたことが多かったようです



▶制服は紺色の詰め襟の学生服に制帽。同じ地区にある一高（黒の詰め襟）と区別するために紺色となったようです

1973

制服改定

●1973年度、詰め襟からダブルのスーツへと制服が改定されました。同時に制帽は廃止。深緑のブレザーとスラックス、エンジのネクタイを着用しました。



1970

女子制服制定

●女子が入学してから約20年、1970年度の新入生より、女子の制服が制定されました。紺の上下に黄色のネクタイ、黒靴と定められました。ジャケットはノーカラーでダブルボタン（2列×3段）。スカートは幅が広めのボックスプリーツです。襟元を明るく彩るネクタイの黄色は、襟章のタチバナにも通じます。静岡・清水は温暖で柑橘類の栽培が盛ん。旧駒越校舎近辺には静岡県の柑橘試験場もありました。



1981

男子制服改定

●1981年度から男子の制服が改定されました。詰め襟からスーツタイプに。明るい紺色のジャケットはシングル、同色のスラックスを合わせます。ブルーグレーのYシャツ、エンジ色のネクタイを着用しました。



1972

女子制服改定



● 1972 年度に女子の制服が改定されました。小池千枝氏によるデザインで、深緑色の上下。ジャケットはノーカラー、背面にバックベルトがついています。



スカートは大きめのボックスブリーツのスカート。後ろは珍しいノーブリーツでした。襟元にはネクタイリボンを着用。学年別に色が異なり、先端に金色の飾り付き。

高校の共通の制服が決まる

◀実はこの制服、学園付属高校の共通の制服とする案がありましたが、実際に着用したのは一高女子（および工業高校男子？）のみでした（左は東海大学新聞 1972 年 6 月 5 号の紙面）

▶長袖ブラウス



ボタン

◀ベストも深緑の共生地。▲夏服正装時はブラウスの裾をスカートの上に出すオーバーブラウスタイプでした



▲応援風景。男子の制服は一度も改定されませんでした

1991 制服改定

◎ 1991 年度より制服が改定され、紺の上下となりました。ジャケットはダブルからシングルへ。ネクタイも青系（レジメンタル柄＝斜め縞模様）に



▲夏服時のスラックス色は、紺（もしくは黒。写真では判別が難しい）でしたが、◀ 1981 年度から明るいグレーへと変更され、涼しげな印象になりました



1992

共学化、女子制服制定

◎ 1992 年度に共学となり、女子生徒 4 名が入学。それに合わせて女子の制服が制定されました。紺色の上下で、襟なしのジャケットは丈が短め。腰ポケットのフラップは飾りだった可能性も。同じ生地で作られたくみ

ボタンが制服には珍しいタイプ。ループを引っかけて留めたようです。白のブラウスにエンジ色のリボンを着けました。中間服の紺のベストは V 字より柔らかな曲線を描いています。長袖、半袖どちらのブラウスに合わせて可也。



▶夏服のスカートは明るいグレーのチェック柄。冬服とはがらりと印象が変わります。▲オプションでポロシャツも着用可能でした

▶男子が詰め襟なので、1970 年代撮影と思われる、遠足でのスナップ。右から 3 人目の女子のように、スカートには吊りひももあったようです



◀◀授業風景と下校風景はともに 1980 年代のもので、夏服が確認できます。女子のネクタイは短め。また、女子の白いブラウスに比べ、男子の開襟シャツは薄いブルーグレーだったと分かります



1992

男女制服改定

●冬服（正装）は男女とも紺色のブレザー。シングルの 2 つボタンで、左胸にエンブレムが付いています。◀男子のブレザーはパッチポケット（貼り付け式ポケット）で、襟のステッチが深め（端からの幅が広め）に入られています。チャコールグレーのスラックス、グリーンが基調のレジメンタルタイを着用。

▶女子は明るいグレーを基調としたチェックのスカート。ベストは透け防止も兼ねて着用します。エンジ色のリボンは花をモチーフにした小紋柄



1998

1999

一高、工業高が統合し 東海大学付属翔洋高等学校開校

●ともに静岡県清水市にあった第一高校と工業高校が統合し、1999年4月から「東海大学付属翔洋高等学校」として新たなスタートを切ることとなりました。統合に先立ち、1998年度の第一高校、工業高校の入学生は翔洋高校の新制服を着用。

1999年度の翔洋高生は1、2年生が新制服を、3年生は旧一高、旧工業高の制服を着用していました。翔洋高校の新校舎は折戸の東海大学清水校舎（現静岡キャンパス）内、工業高のY字型校舎の隣に建てられました。



▶間服（あいふく）も制定されました。スラックス、スカートともに茶色をベースにしたチェック柄です。白色のセーター、ベストもありました。着用する生徒が減少し、間服は徐々にその姿を消していきました

▲指定の冬服コート。男子は紺色のダブルコート、女子は若草色のピーコートです。清水は冬でも温暖な気候のため、着用する生徒は少なかったようです

▲夏服（正装）はスラックス、スカートともに濃い色合い。女子は紺色のリボンを着けました

◀オプションのポロシャツは襟のラインが特徴的です

▶2007年度より、夏服（正装）女子のブラウスがオーバーブラウスへと変更されました。生徒の意見を反映したものの、可愛らしさがアップ！



▶男女冬服（正装）学園付属高校のイメージカラー「東海グリーン」をブレザーに使用。靴下も同色でコーディネート。男子のスラックスと女子のスカートは、ともに灰色がベースのチェック柄です。男女ともネクタイを着用します



▲翔洋高校のスクールバス。1999年度には2コースのみでしたが、2017年に現在の全7コースとなりました

▲指定バッグ 紺色のスクールバッグ。部活動指定のバッグでも通学可能です



2003

東海大学付属 翔洋中学校に 校名変更し、 清水市折戸の 翔洋高校校舎内 に移転



▲柚木からの移転と校名変更に向けて、在校生と教職員で「アリガトウ一中」の人文字を描いた

2009

東海大学付属 翔洋高等学校中等部に 校名変更

◀男子のネクタイの柄、ワイシャツ左胸ポケットの「Tokai」の刺しゅう、女子のリボン、ベスト（スカートと同一の生地）などが確認できる1コマ。2008年度学校案内パンフレットより



◀ブレザー左胸のエンブレム。中央に東海のイニシャル「T」の花文字を置き、王冠と葉冠が囲む。頂点に輝くのは星のようにも見えますが、タチバナの花をモチーフにしたかつての襟章を継承したデザイン。葉冠もタチバナの葉と思われ、中央下部には果実（球状）の意匠も確認できます。



2015

2014

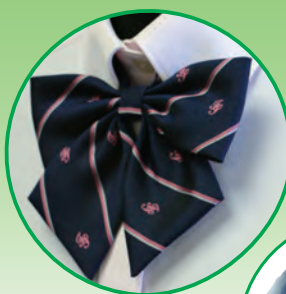
東海大学付属静岡翔洋高等学校に校名変更

男女制服改定



●2014年度の新入生から、男女とも制服が改定されました。ブレザーの色がそれまでのグリーンから通称「東海ネイビー」と呼ばれる紺色に。男子のネクタイ着用は変わりませんが、女子はリボンに変更となりました。2015年度には校名も変更され、装いも名前も新たに、翔洋高校が力強く、華麗な一歩を踏み出しました。

●夏服（正装）。男子の半袖シャツは薄いブルー。女子のブラウスは白。どちらも裾を外に出して涼しげに。▼シャツは前あわせと襟の内側に極細の青色ストライプになっています。さりげないおしゃれですね



▲冬用のリボンはネクタイと同柄。紺地にピンクと白のライン、「TS」の花文字で構成。ブラウスは薄いピンク色です。

◀冬服（正装）のスカートは柄は、紺地にピンクが入った暖かみのあるチェック柄。リボンの柄とも統一感があります



▼スラックスは冬と夏で同柄ですが、素材が異なります



▲2014年度の改定当初は、ネクタイ着用は男子のみとなりました。柄は付属諸校でも主流のレジメンタルタイプ。紺地にピンク色で「TS」の花文字があしらわれています。ワイシャツは薄いブルーです



◀ブレザーのボタンと、左胸につくエンブレム。「東海・翔洋」のイニシャル「TS」の花文字に「SINCE1951」と刻まれ、前身校からの伝統を感じさせます



2015

2014

東海大学付属静岡翔洋高等学校中等部に校名変更

男女制服改定



●2014年度の新入生から中等部でも男女の制服が改定されました。第一中学校の時代から数えて、男子は4代目、女子は3代目の制服となります。2015年度には「東海大学付属静岡翔洋高等学校中等部」へと校名変更。校名に「静岡」の2文字を加えたのは、より地域の皆さんから愛され、地域に根差した学校として生まれ変わるためでした



▲ワイシャツはボタンダウン。左胸のポケットに「T」の花文字の刺しゅう入り



▲リボンにはエンブレムの意匠が盛り込まれています。ネクタイも同柄。▼スカートは夏冬同柄ですが、生地が異なります



▲女子のブレザーのみ、首の裏地の部分にスカートと共生地の当て布がついています。▶靴下の色は何度か変更があり、2024年度現在は男子がグレー、女子が紺色となっています



▲エンブレムは先代の制服と同じデザインを継承

▲冬服（正装）は、紺のシングル、2つボタンのブレザー。翔洋高校のものと比べると、少し明るい紺色となっています。スラックスとスカートはグレー系のチェックで落ち着いた装い。ネクタイとリボンは、色柄ともに統一感のあるデザインに変更されました



▲ブレザーのボタン



▲夏のリボンは白とピンクに加え、薄紫のラインが入っています



▲オプションで紺色のセーター、ベストの着用が可能です。どちらも左胸に「TS」の刺しゅう入りです（写真では見えませんが……）。職員室で突然声を掛けられたにもかかわらず、快くお話をしてくれた生徒さんに感謝です！

▶学校指定のスクールバッグがあります。多くの生徒は部活ごとに指定のリュック等を使っているようです



▲夏のスカートはグレー地に白のチェック柄で涼しく軽やかに。▶靴下は女子のみ指定。紺色に「TS」の刺しゅう入り。男子の靴下に指定はありませんが、色は白、黒、紺、グレーの無地と決められています（ワンポイント可）



▲登下校風景。静岡は冬季でも比較的温暖な地域であり、加えて各方面行きのバス便が出ているので、コートを着る生徒はほとんど見かけないとか

2024

女子スラックス導入

◎2024年度から、女子の制服に新たにスラックスが加わりました。購入は自由ですが、式典時の正装として着用できます。男子と同柄ですが、女性の体型を元に新たに起こされたパターンで、着用時のシルエットも綺麗に決まります。なお、女子がスラックスを着る際、冬服時はネクタイを着けず（夏冬ともにリボンの着用は不可）



▲女子のブラウスはスカート着用時のものと同じ、白の無地です。◀女子のネクタイは男子のものと同じ柄ですが、サイズが異なります（幅、長さが一回り小さい）。ネクタイ着用時の女子のブラウスは薄いピンク色で、変更ありません



2024

女子スラックス導入

◎2024年度から、女子もスラックスの着用が可能になりました。スカートと両方を購入することも可能です。高校同様、スラックスの柄は男子のものと同じですが、パターンは異なります。また、女子がスラックスを着用する際はネクタイを締めず。



❖ 14th meeting を終えて ❖

清水駅からバスに揺られること、およそ20分。前号（付属静岡翔洋小学校・幼稚園）に引き続き、静岡キャンパスを訪問しました。午前の取材を終えて、昼食は校内の「翔洋食堂」へ。温かくておいしいお昼ご飯をいただいていると、授業を終えた生徒さんたちが次々とやってきます。元気な挨拶に、こちらも思わず笑顔。午後からの取材に気合いが入りました。次回もお楽しみに！



◎第一中～翔洋中の学校案内変遷。左上から時計回りに、1965年は柚木の校舎が表紙、A5判で白黒でした。1987年度は体育祭のピラミッドにキャッチフレーズ「心の澄んだたくましい子を」を添えて。1990年度は一中創立40周年。B5判となり、キャッチフレーズは「～たくましい子」に変わっています。1993年度はサッカーが盛んな静岡らしく。2018年度は「変わる！静岡翔洋」、2024年度は「“夢中”って、無敵。」のフレーズが。共にA4判。学園中等部のカラーである黄色が映えますね。



◀スラックスはグレー系のチェック柄。夏冬同柄ですが、生地が異なります。2024年度から導入された女子のスラックスも同じ柄です



学校法人東海大学学園史資料センターでは、
学園と、学園に集った人々の足跡をたどる資料を収集しています。

各部署や学部学科、機関で保存期間の満了となった文書が発生した際には、当センターまでご連絡ください。

個人として下記のような資料をお持ちの方は、あわせて寄贈や移管のご協力をお願い申し上げます。

《受講・講義ノート、研究資料、書簡、手帳、日記、メモ、写真、記念品、機関誌など》

※このほか保管に困っている物品、資料になるか不明のものがありましたらご一報ください。

また、学園の歴史に関するレファレンスに応じています。

事項の時期や経緯の確認、記念誌の作成、パネル写真展の企画などの際は、お気軽にご相談ください。

資料提供者一覧

2023年4月～2024年3月

【個人】

萩原公世
沓澤智子
沓澤宣賢
櫻井糧
竹下翔
谷卓見
中村武徳
蓮見恵太
真島敏史
水尾文彦
村井正己
本山兼道
山花京子

【機関・団体】

株式会社いき出版
株式会社カナサシ重工
富士山清水港クルーズ株式会社
学校法人東海大学
理事長室学園総務課

理事長室学園校友・広報政策課
病院本部病院運営企画室

東海大学

学長室施設設備担当
学長室総務担当（出版）
学長室技術担当（教育設備）
学長室技術担当（印刷）
学長室広報担当
学長室教学担当
学長室評価担当
ヒューマンソサエティカレッジオフィス
グローバルシズンカレッジオフィス高輪ランチ
グローバルシズンカレッジオフィス渋谷ランチ
スルガベイクカレッジ静岡オフィス船舶管理担当
付属図書館渋谷図書館
医学部付属八王子病院
東海大学電気電子工学会
星医会
湘南学生会キャンパス創造委員会
東海大学付属相模高等学校

東海大学付属静岡翔洋高等学校
東海大学付属静岡翔洋小学校・幼稚園
東海大学付属望星高等学校
東海大学新聞編集部

順不同・敬称略

組織、部署等の名称は2023年度当時のもの



●付属望星高等学校から2023年7月、野球部、サッカー部、バスケットボール部のユニホームを受け入れ。各クラブのユニホームも学園史を物語る貴重な資料です

学校法人東海大学 学園史資料センター

〒259-1292 神奈川県 平塚市 北金目4-1-1
東海大学 湘南キャンパス 5号館2階

☎ 0463-63-4700（直通） FAX（利用を停止しました）

☎ 0463-58-1211（代表） 内線 2559

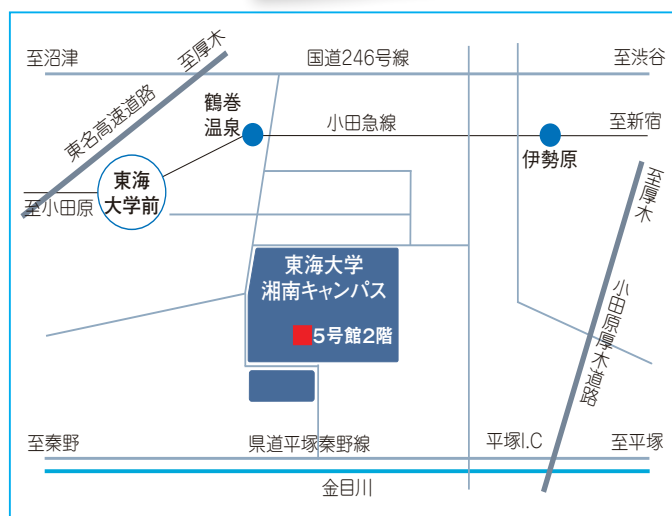
ホームページ <http://www.pr.tokai.ac.jp/gsc/>

メールアドレス shiryo-center@tokai.ac.jp

フェイスブック <https://www.facebook.com/TokaiUniversity.archives>

アクセス

- 小田急線「東海大学前」駅下車、徒歩25分
または神奈中バスを利用、「東海大学前駅南口」バス停から ◆「秦野駅」「下大槻団地」行で「東海大学北門」下車／ ◆「平塚駅北口」行で「東海大学1号館前」下車
- JR東海道線「平塚」駅下車、神奈中バス「平塚駅北口」バス停から
◆「東海大学駅前南口」行で「東海大学1号館前」下車
◆「秦野駅」「秦野駅南口」行で「東海大学正門前」下車



東海大学学園史ニュース No.19

Tokai University Educational System Archives News

2025年3月1日発行

編集・発行 学校法人東海大学学園史資料センター